

學小
新撰
修身書

安原時太郎閱
平井義直編纂

219

176
2
50

102

館藏總會育教本日大			
一	四	一	八
一	五	五	函
冊	號	架	

匣一
身一
別

東
行
二

K110.1
174
1

B I

211



小學新撰脩身書

此卷ハ初等科第一年後期生徒ニ授クル
爲ニシテ簡易ナル古今ノ格言ヲ纂メ孝
弟忠信ノ道ヲ知ラシムルノ書ナリ

新撰脩身書

例言

一斯編ハ文部省修身書編纂心得ニ基ツキ善行
ヲ省キ洋語ヲ除キ偏ニ本邦漢土聖哲ノ金言
ヲ鈔録ス而シテ專ラ小學兒童ノ暗記シテ必ス之
ヲ身ニ行ハンコトヲ要スルカ故ニ首篇ハ其解シ易
フシテ兒童ニ切要ナル語ヲ採萃シ漸次高尚ニ
及フ果シ高キニ登ル必ス卑キヨリスルノ意ナリ

東
不
篇
中
好
記
ス
ル
所
ノ
章
句
ハ
私
意
以
テ
一
字
ヲ
更
メ
ス
且
各
其
出
所
ヲ
明
記
シ
一
ニ
ハ
以
テ
兒
童
生
徒
後
其
原
書
ニ
遡
リ
考
窮
索
搜
ノ
便
ニ
供
ス
ル
也

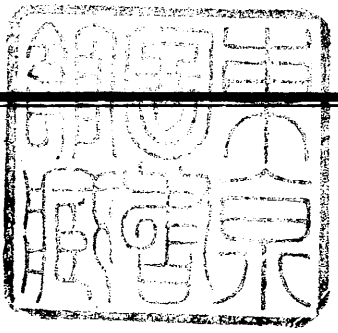
後其原書ニ遡り考窮索搜ノ便ニ供スル也

新撰脩身書 卷之一 例言

一 列記スル所ノ章句年代ヲ逐ハサルモノハ予
カ平居隨筆ノ鈔録ニ係ルモノ多キニ因ル今改
メ正サス而シテ篇中往々畫ヲ挿ムハ兒童ヲ
シテ是ニ目テ早ク其義理ヲ感覺セシムルノ
一 助トナスニアリ
一 予謏劣ヲ揆ラス今是書ヲ編ス恐ラクハ鹵莽
ノ誚ヲ免カレス此レ固ト小學兒童修身ノ一
端ニ供スルモノニシテ原ヨリ大方ニ示スニ
アラス觀者幸ニ之ヲ諒セヨ

編者識

學小新撰修身書卷一



安原時太郎閱

平井義直編纂

第一章

○ 善く父母につか

ふるを 孝といふ

丘濬 學的

新撰修身書卷一

中庸 卷第一 第二十章 二十二

○よく兄長ふつあ

ふるを弟といふ同上

○已をつくすこれ

を忠といふ同上

○實をもつてさる

こを信といふ同上

○已を推して人に

およほすを恕とあ

す同上

○誠ハ天の道あり

これを誠にさるは

人のみちあり中庸

中庸 卷第一 第二十章 二十二

○愛とは 人を愛と
まむをいふ 人を小
くみ うとんぜざる

なり 初學訓

○敬とハ たつとび
あがめる ところを

つと 忽せに せざ
るをいふ 徂徠辨名

○謹とは 心に恐ま
ありて 事の誤り
あからんやうにす
るなり 童子訓

○人道も 只忠信小

あり 誠なうざれば

物おし 二程全書

○内その心を 正ふ

し 外其行ひを 脩

む 虞溥

○言忠信あり 行ひ

篤敬あり 念りをこ

らし 欲をふさぎ

過を改む これ身を

脩るの 要あり 學的

第二章

○師の教へをうけ
學問をる法を善
をこのみ行ふをもつ
と志とすべし
童子訓
○田あまごえ 耕さ
ざれむ 倉廩むなしく

書阿れども 教へざ
まバ 子孫思ふあり
白樂天
勸學文
○玉琢るざれむ 器
を成さば 人學ばざ
れば 道を知らず
礼記
○凡そ子弟ハ 早く

新撰家範書 卷一 五十二

起て晏
 く眠らん
 ことを要
 するべし
 ○常に聲
 を低ふし

童蒙
 須知



氣を下し 語言詳
 めに緩ふするを
 要するべし
 ○喧鬪争のところに
 近くべからば

同上

同上

○女も人に従ふも
のなり 幼ふしてハ
父兄に従ひ 嫁し
ては 夫小従む 夫
死しては 子に従ふ

禮記

第三章

○學問も まづ志を
立つるを以て 本

とす 大和俗訓

○道近しと 雖ども
行のされど 至らず

事小なりと 雖と

之為とぎまば 成

らず 韓詩外傳

○志ハ以て 言を發

し 言ハ以て 信を

出し 信を以て 志

を立川 左傳

○志は一日も 墜は

づからず 心を一時

を放つべからば 劍掃

○言語を 慎し 妄

小發せざるハ 仁を

求むる乃

端あり

學的

○ 跬歩を

積まざれ

る^〴 以て千里に至

る^〴 小流を積

由ざれ^〴 以て江河

を成^〴 是ことあり
荀子

第四章

○ 人を貴み^〴 己を

賤み^〴 人を先^〴 小^〴 して

己を後に^〴 是^〴
禮記

○ 前の人能^〴 長短を

説く^〴 を休めよ^〴 自

新編 荀子 卷之四

家の背後小 眼あり

呂新吾續小兒語

○蓬 麻の中に生

ざれぞ 扶けずして

直し 荀子

○聲は 小として

聞へざるハなく 行

ひは 隠るとして

形ハまざるを同上

○善つまざれぞ 名

を成さ小足らず 易經

○多く聞て 其善か

小弁 巽 九二 巽 九二

る者を選
みて之
に従ふ 論語
○博く學
ぶの道も
見ると



聞との 二川を
法とむ 大和俗訓

○高きに 升るハか
ならず 下より上
遐きに 陟るハ必
彌よりす 尚書

新編 和俗訓

功を虚を以て成
名ハ偽
立つべ
班固

○功を虚を以て成
名ハ偽
立つべ
りを以て
らむ

○書をよみ 學問を
れむ 聞見の智を

日々に進むされど
も 知る事を 行
えざれば 徳行を
日々ふをくれて 進
まず 大和俗訓

○古今 書をよむ人

外新撰修身書 卷之一 十三

多けきど 道を
知る人 稀あるハ
書をよみたるのこ
にて 思えざきバか
り 初學訓
○奢る者ハ 憂ひ多

く 儉ある者ハ 福
多 化書
○好んで 善を行ふ
ものも 天たさくる
に 福をえつてす 桓寛
○我らために 便り

よたことをはかる
をみお人小 害あり
り 大和俗訓

第五章

○病を口より入り
禍ハ口より出づ

故に君子を 言語を
つゝみて 飲食
を 節にを 要覽

○言語 自らほい
まゝなれど 人と怨
みをあす 常安民

論語集注卷之二十一 子罕篇第九

○一言もつて知ると

かゝ一言を法と

不知と志を言慎ま

ざるべからば論語

○言小儉に以て

氣を養ふべし私

了儉小に以て福を

獲る處譚子

○人をほ免過さるも

諂小近く又人を

知らざる能あやま

ち阿り不智といふ

小行集注卷之二十一 子罕篇第九

べー凡そ人を褒
貶すること 慎むべ

初學訓

○人情りて 侈をバ
貧し 法とめく 儉
おまぎむ富む 管子

○忍とは 奢りを押
へて 慾をほしいゆ
いにせずしてこ
らゆるなる 家道訓

○怒とを 我が心
て 人の心を 推は

小新撰修身書 卷之二 家道訓

かゝりて 人の好むこと
とる 施こく 嫌ふ
ことは 施こさず 同上
○孝子は 高き小登
らび 危きとふま
とえ 父母の遺體を

敬ふ故小 跬歩も
其親を わされざる
あり 大戴礼記

小 新撰脩身書卷一終

新撰脩身書

卷一終

176
2
50

明治十五年五月九日出版版權御願
同十五年五月三十日版權免許
同 年六月 刻成發兌

定價金六錢

編輯者 京都府平民 平井義直

上京區第廿二組蛸茶師町十一番戶

出版人 京都府平民 杉本甚助

下京區第五組辨慶石町十六番戶

小學新撰修身書

安原時太郎 閱
平井義直 纂

二

176
2
50

大日本教育會書館			
一	四	五	一
一	五	架	八
册	號		函

函一册一號

頁十一

K110.1
181
2